

(三) 農業協同組合

熊野町信用組合が設立認可されたのは昭和三年六月二十日、事業を開始したのは八月十日であるが、当時混屯とした経済恐慌の下で、この組織を産み出した関係者の努力は、まさに献身的なものがあつたであろうと思われる。爾来農村不況のうちに着実なペースで歩み続け、昭和九年七月中溝支所の現位置に事務所移転、越えて十三年には創業十周年を迎え新に購買、販売、利用の各事業を加えいわゆる四種兼営形態にまで拡大されたのである。それはまた配給統制経済に備えるためでもあつた。その後萩原、追分、出来等の倉庫が整い、降つて昭和二十二年には農業会、翌年には更に農業協同組合に発展的改組を見た。これら一連の組

農業協同組合のあゆみ

年月日	うつりかわり	年月日	うつりかわり
昭三、六、二〇	熊野町信用組合設立認可	昭一九、	熊野町農業会設立
八、一〇	創業(位置 三三三三ノ一)	二一、三、三	貯金封鎖せられる
八、二三	連合会加入	二一、八、一一	第二封鎖貯金の制度実施
五、八、一四	産業組合中央会広島支会加入	二二、一一、一九	農業協同組合法施行
七、二二、二八	同中央金庫加入	二二、三、五、五	熊野町農業協同組合設立認可
八、四、二八	創立五周年記念式挙行	八、一五	熊野町農業会解散、同時に農業協同組合事業開始
九、七、二三	事務所移転(位置 三六五八ノ一)	二五、五、	徳坊子、出来西倉庫萩原に移転
一三、一、二三	創立十周年記念式挙行	二六、一一、	講和記念クルミ植樹
一〇、三二	購買事業開始	二七、三、五	大蔵省、日銀総裁貯蓄表彰状受領
一〇、二八	販売事業開始	一一、三〇	追分支所竣工式挙行
一四、一、	全国購買組合連合会加入	二八、三、七	鉄筋造金融部事務所落成
一五、	萩原農業倉庫建築	六、四	事業部中溝支所開設
一六、	追分、出来倉庫購入	三〇、二、一	鉄筋造農業倉庫落成式挙行

織変更は戦後の経済混乱を救い、再建体制を固めようとする国策の一こまであることは見逃せない。そして昭和二十七年三月には貯蓄優秀組合として大蔵大臣、日銀総裁より表彰され、同月五日多彩な祝賀行事が行われたことは未だ世人の記憶に新しいところである。降つて、昭和二十八年三月同組合金融部の建物が鉄筋コンクリート二階建の新装をもつてデビューし、同三十年末には萩原農業倉庫が、同様鉄筋コンクリートに改造築され、組合の不動の基礎を表徴することになった。こうした長い、たくましい足どりは一層くわしく前の表によつて知ることができる。

農業協同組合活動のあしどり(単位円)

名称	年度	組合長	組合員数	口数	払込出資	貯金高	金融部	貸付高	事業部	米麦買付	物品販売	備考
熊野町信用組合	昭三	三神鳥林右衛門	四三三	六八	二、三三〇	四〇、四六一	一七、七七七	一〇〇、一三四	?	三、三九	二、三九	昭一三改組改
	四	阿原 臣	五〇四	六六	二、八三三	七二、八〇八	五、七七六	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	一口二〇円、
熊野町信用、販売利用組合	五	梶山 幸三	四八〇	六六	三、三三三	一〇四、七七七	六、一五二	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	決算期十二月
	六	〃	五七九	六六	三、三三三	一〇八、一七〇	九、〇七二	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	三十一日(以
	七	〃	七九七	六六	三、三三三	一一〇、一七〇	一七、七〇二	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	下同)
	八	伊藤 実雄	一、三三七	二、三三三	三、三三三	七五、五八八	一〇〇、一三四	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	昭一三改組改
	九	〃	一、四三七	二、三三三	三、三三三	五八、六八二	二二、一六三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	決算期三月三
	一〇	〃	一、四八三	二、三三三	三、三三三	九三、六三三	二二、一六三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	十一日に改正
	一一	益永 信一	一、四八三	二、三三三	三、三三三	八〇、三三三	三〇、一三四	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	(以下同)
	一二	遠山 厚	一、四八三	二、三三三	三、三三三	九三、六三三	三〇、一三四	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	出資
	一三	藤河 玉三	一、四八三	二、三三三	三、三三三	五五、七〇〇	一五、一五五	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	一口四〇〇円
	一四	〃	一、四八三	二、三三三	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?	
熊野町農業会	一五	久保田正記	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	一六	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	一七	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	一八	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	一九	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二〇	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二一	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二二	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二三	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二四	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二五	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二六	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二七	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二八	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	二九	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	三〇	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		
	三一	〃	一、五五一	三、三三三	一、九三三、三三三	三三、三三三	三、三三六	三、三三六	三、三三六	?		

備考 年度は各種区分観察に便利なように適宜選んだ。

由来この組織は、農民の共同利益と共同福祉とを目的とするものであつて、そのためには、金融事務の外、購買、販売、利用等多角的経営を必要とするが、それらは同組合の金融部、事業部両機構の中に活かされ、金融機関として、幹旋機関として、町民の受ける利便は大きい。このような使命は、前の表に如実に表わされている。即ち、前歴時代からの数字を掲げると約三十年前発足時代に比し、活動内容は長足の進歩を遂げ、昭和三十一年度の指数はそれぞれ左表の指数を示している。

昭和三十一年度の指数

項目	指数
組合員数	三六
口数	四二
払込出資金	八三九
貯金高	二、五九一
物品販売	五七六

備考 昭和三年度を一〇〇とする。
但し物品販売は昭和十四年度を一〇〇とする昭和三十一年度の指数である。

均額は一律に

増加し、昭和三十一年十月末の総世帯二、一四三の内七六・八%が組合員として加入し、一世帯の貯金平均四八、九五九円、一人当りのそれは一〇、八〇四円に上つている。そして、貸付の形で組合を利用する程度は、また、そ

各平
均額は一律に
平 均 表 (円)
払込出資金が八三九倍に達していることは昭和二十三年度一口の金額が二〇円より四〇〇円に増加されたことが主因であろうが、物品販売及貯金高の増幅率、特に貯金高のそれは著るしく最近二ヶ年一億円目標に達し、宿願を成就した観さえうかがわれる。尤も、その背後に、価幣価値低下の問題がひそんでいることは言うまでもないが、同時にまた貯蓄意識がしみ通つてきたことも事実である。次の表を見てもそれは明らかである。

年度	組合員	一世帯	貯金高	貸付高	貯金高	一人	貸付高
昭二七	六九、五%	二五、七二七	一一、七三四	五、七〇七	二、八二五		
二八	七二、六	三三、三九七	一五、二五一	七、三六二	三、三六二		
二九	七四、三	三六、一〇七	一九、一二一	七、九一二	四、一九〇		
三〇	七六、八	四五、六九六	二〇、六五二	一〇、〇一九	四、五二八		
三一	七六、八	四八、九五九	二五、〇五六	一〇、八〇四	五、五三〇		

備考 世帯及人口は住民登録による各年一〇月一日の数字を基礎とした。

れぞれ二五〇五六円、五、五三〇円の数字を示すのである。換言すれば個人は貸付を受けることにより、経営をきりまわし、約二倍の貯金において組合に還元するのである。この循環過程が、即ち町民との深い結びつきを示すものであつて、同時に企業における温い血液ともなつていたのである。事実、この他各種の販売事業をも兼営し、その範囲は肥料を中心として繊維、金属、窯業の各製品並に日用雑貨にまで及び、総売上高最近は三千三百万円に達している。更に、搾油、精米、打綿等の事業を周辺とする企業体制を打立て、一応明るい経営多角化に乗出すようになった。

われわれは、それが「組愛」の表れであると眺めたいものである。